

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2010年10月6日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合) [No.156]

JR総連は革マル中央との対立を強調し無関係を主張するが...

「JR革マル派43名リスト裁判」の口頭弁論が9月15日に東京地裁で開かれ、原告のJR総連側が2010年6月30日に提出した準備書面に対して被告の「JR東労組を良くする会」側が提出した「求釈明書」に対する主張が記載された準備書面が明らかになった。

1999年12月までJR内に革マル派グループがあったことを認めたJR総連側は、リストが配付された2006年9月当時に「原告らが革マル派であったということの主張立証は被告らにおいてなされるべきである」などと主張して、現在は革マル派とは絶縁していることを必死に強調している。また、「これまで公式見解や訴訟において、1999年12月以前から、原告らやJR総連・JR東労組と革マル派とは無関係であると主張してきたのではないか。それらの主張は虚偽であったと認めるのか」との求釈明に対しては、「原告らが、準備書面で説いたことは、かつて、JR総連やJR東労組内に革マル派のグループが存在していたということであり、JR総連やJR東労組が革マル派と関係があったなどと主張するものではない」「組合組織であるJR総連やJR東労組は、革マル派と関係を有していたことは、過去においても現在においてもまったくない」などと強弁している。

彼らは革マル派中央との対立を強調し、JR総連・東労組が革マル派と関係がないよう主張するが、この難解な「対立」の構図については、関係する著述を紹介しながら、今後、詳しく検証していきたい。

革マル派内抗争での松崎氏勝利で創始者黒田氏は議長退任へ？！

JR総連側の準備書面に記載された、1992年の「3.1提起」以降の革マル派中央と、JR内の革マル派グループや沖縄県委員会との対立の収束について、宗形明著「異形の労働組合指導者『松崎明』の誤算と蹉跌」(高木書房)には、以下の記載がある(p.25~)。

党中央が「黒田からの提起」として、沖縄問題は棚上げする、事態を打開できなかった責任をとり議長を辞任する、等の内容を上野孝に伝えたり(1994年2月下旬)、他方、JR革マル派は、「トラジャ会議」などを経てカンパ上納停止を決定。「N擁護」「産別自決」などを旗印に他産別フラクションメンバーへのオルグに乗り出す(同年4月上旬)、などの重大事態にまで立ち至ったという。更には黒田が浅野孝や、これも国鉄出身トラジャのOに電話で対応の変化を要請したが拒否されたり(同年5月中旬)もあった末、5月26日、黒田は「トラジャ同志へ」と題する文書で「議長を辞任する」との意思を表明したと言われている。そして、まるで同年6月5日、6日開催のJR東労組定期大会に合わせたかのように、1994年6月6日付革マル派機関紙『解放』(第1321号)は、無署名論文「労働運動の展開上の偏向について」を掲載し、「賃プロ魂注入主義一掃」を訴えた。これは端的に言えば、黒田の「松崎路線支持」論文である。...(中略)... 革マル派のカリスマ議長黒田寛一がどうにもならなくなった「沖縄革マル組織問題」は、1995年に入り松崎が本格的に收拾に乗り出したことによって、年末までにほぼ収まった。そして、1996年10月13日、革マル派「ハンガリー革命40周年政治集会」で、同派創設以来のカリスマ議長黒田の「辞任」と「植田琢磨」なるどこの誰とも知れない新人の「議長就任」が公表されたのであった。...(中略)... 私は黒田と松崎の勝負はこの時点で、「けりがついた」のだろうと思う。

当該準備書面の記載は、警察資料や宗形氏の分析と符合していることからみても、上記内容についても、その信憑性は非常に高いと考えられるだろう。